



“MY TOWN” うおっちゃん 歩キ目デス & 足ラテス

Vol.51

『戸島紀行』パートI 宇和島市

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
ヘリテージマネージャー

お昼前、いよいよ盛運汽船の高速船あけぼのは戸島に向けて出港した。今回は、宇和島に浮かぶ有人離島、戸島の訪問記。窓外を眺めていると、丁度、宇和島港をふさぐようにある九島の南岸沿いを、船は静かにすすめるように進んでいる。山肌に残り添うように、蛤、百之浦、本九島などの集落が右手に続く。左手の窓からは石応の辺りが眺められる。この辺の山塊は、その昔

て三浦湾に入る。右手に高島を見ながら、やがて三浦半島の先に進路が取られ、重要な文化的景観として国の選定となった「水荷浦の段畑石垣」も、海から間近に眺めることが出来る。それにしても、遠く近くの島影や山影の景色の妙は、飽きることもないのどかなシチュエーションだ。所々には何やら白く見える固まりが点在し、既に山桜が咲き始めているらしい。まだ3月なかば、図らずもかなり早い花見が海上から出来たことになる。遠方に吉田湾や明浜の大崎鼻方面が眺められた頃、船は西進から南に転じ細木運河(1961、S36竣工)にさしかかる。宇和海には、この他にも吉田の奥名運河(戦前)や、由良半島の船越運河(1966、S41竣工)などがあり、いずれも沿岸航路の需要による戦前戦後の



架橋計画のある九島

“宇和島石”の石切り場のあった所で、石引などの地名も残る。宇和島城の石垣はそうやって築かれた。船は快調に、九島、石応の間にある水道を出



細木運河をくぐる

開削だが、全国的にも貴重な土木景観だと言える。運河を過ぎると、直ぐに高助の港に寄る。宇和島湾の南から北西方向に伸びる三浦半島は、その西端が南に向かつて自在鍵のように折れ曲がり、人工で開削された運河によつて島のようになっているが、この辺りを蔭淵と言う。高助は陸路からだ大変に遠い集落のようである。しかしそんな場所でも、あれは蔭淵小学校の建物か、立派な鉄筋の三階建てが不釣り合いな程に威容を誇る。廃校や限界集落など、地方は惨たんたる有様だが、ここはどうだろう。湾は周囲を半島に取り囲まれ波穏やか、横浦、豊之浦、宿の浦などの集落が続く、真珠の養殖いかだやその作業小屋と、思しき建物などが見える。しばらくすると、次の集落大島に寄港、高石垣に囲まれたお社が見えてきた。今は穏やかなこの海も、一旦荒れると凄いのだろうと察せられる石垣の高さ。よく見れば、上にもう一段人の背丈ほどの高さを積み増しているのが認められた。大島の港を出ると直ぐ、三浦半島の端っこに当たる契島との間の瀬戸を進む時、向こうに大きな島影が見えてくる。日振島だ。平安時代の天慶二



(939)年、あの藤原純友が叛旗をひるがえした所。また、幕末期に八幡浜で私塾を開き、門弟数千人を数えた上甲振洋は、この日振島の代官だった経歴に因みその名とした。その日振島に連なつて見えてくるのがいよいよ戸島。

12時半近く、戸島本浦港に到着。予想とはうらはらに、何だか港が賑々しい。紅白幕のテントや幟旗、停泊の漁船には大漁旗。ハテ？勿論我々乗客を迎えるワケでは無かるうに。

コンクリート波戸に着岸の際は、潮位の干満に合わせてか、ビールケースの代用踏み台が置かれ、それでも今日は高いので高齢者の上陸には介助が必要。そんな温かな光景が何だか可笑しみを誘う。陸に上がって早速その辺りに居た地元の方に聞いてみた。



すると、今日は年に一度の「漁日」で、今餅まきが終わった所なんだとか。リョービ？それは釣具のメーカーぐらいしか思い浮かべられないが、海に感謝して年に一度、漁を休むお祭りで「漁留め」とも言い、この辺りの港町ではもつぱらの事らしい。すると、神主さんと思しき直垂装束のお方が、それまではずしていた恵比寿さんのお面を付け直し、本物の鯛を釣り棒に吊るし、ポーズを取って下さった。このいでた

ちで漁祈祷をするのだそう。晴れの日のお神酒も手伝っていたのか、サービス精神満点の対応に、とても印象深い戸島への初上陸となったのだった。加えて、宇和島市の無形文化財となつている「お伊勢踊り」が、丁度昨日奉納されたばかり、という話なども伺え、そうした年に一度の得がたい島の生活文化がリアルに伝わってききた。

さて、港には眼前に見事な護岸石垣が数十メートルも連なつていて、ある種の趣を醸している。石質は



港の防潮石垣

やはり宇和島石、県下では宇和島以南の地層的特質でもある四万十帯の砂岩である。整然とした矢羽根積みとなつていて、戦後間もなくの頃にでも築かれたものか。いよいよ島内の探索をスタートさせる。一番の目的であるキリシタン大名一条兼定の墓へは、楽しみを後に取っておくことにして、まずは集落全体をどこか眺められる場所とは、と。港の南側に小高い丘があり、先ほど聞いたお伊勢踊りが奉納されたお伊勢



「漁日」の祭神、恵比寿さん

山がそれだというので、そちらに向かう。途中の道も、例によってキョロキョロしていると、馬鹿に丁寧な板囲いをした菜園がいくつもあつたり、空き地にはノジギクが咲いていたり、飽きることはない。板囲いはどうやらイノシシ除けであるらしい。



猪避けの囲い

やがてお伊勢山への道にとりつき、結構急な坂を、少しあえいで登る。頂上の丘の上には、まだ新しい鳥居とお社が建てられていた。そのぐるり三方は、屋根まで届くような石垣で囲まれ、当時の村人たちの、神聖な場所への念入りな手の施しうが感じられる。ここからもう一段上がった所に、これも新しいが「魚貝類供養塔」がある。そこからは本浦集落全体が見渡せ、北隣の大内浦まで見える。ここからだと、兼定の墓がある龍集寺の屋根もよく分かり、位置関係の理解が出来る。全体を俯瞰する視点は、やはりとても大事だ。



戸島本浦を見渡す。山際に龍集寺(矢印)